統合失調症患者の薬物療法に関する処方実態調査（2020年）その６
－入院患者病棟種別ごとの処方実態について－

○社会医療法人北斗会　天正　雅美
精神科臨床薬学(PCP)研究会
鈴木貴子、高田憲一、佐藤康一、北川航平、
宇野準二、加藤剛、梅田賢太、三輪高市、野田幸裕、吉尾隆

方　法

- 対象

  調査の目的に賛同の得られたPCP研究会会員の所属する施設に入院中の統合失調症患者

- 調査日

  2020年10月31日

- 調査項目

  年齢、性別、身長、体重、血圧、心電図異常、血液、生化学、血糖、服薬回数、服薬指導実施の有無、抗精神病薬、抗パーキンソン薬、抗不安薬・睡眠薬、気分安定薬の投与剤数および投与量

- 病棟種別

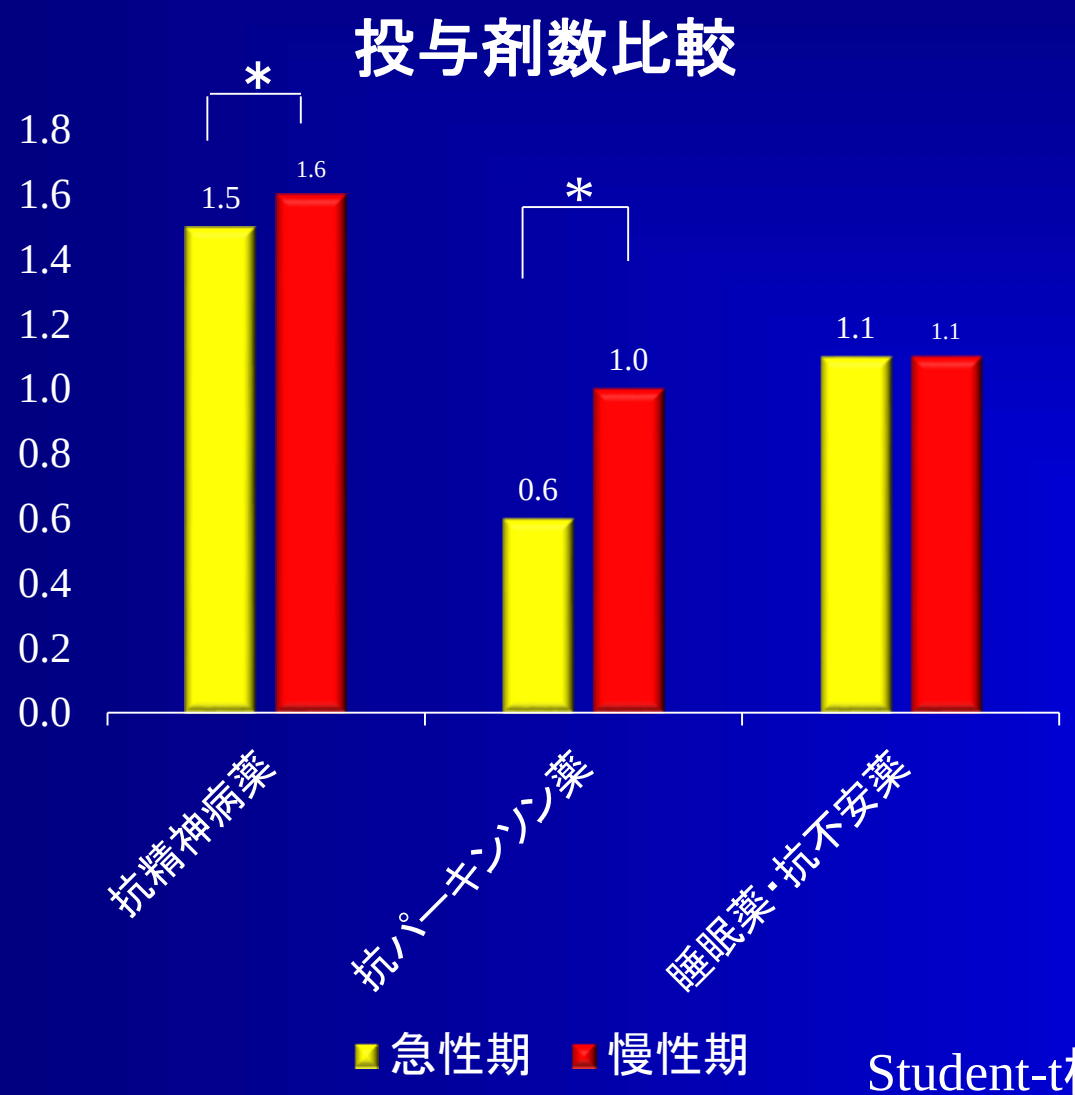
  救急、急性期、精神一般、療養、身体合併症、その他

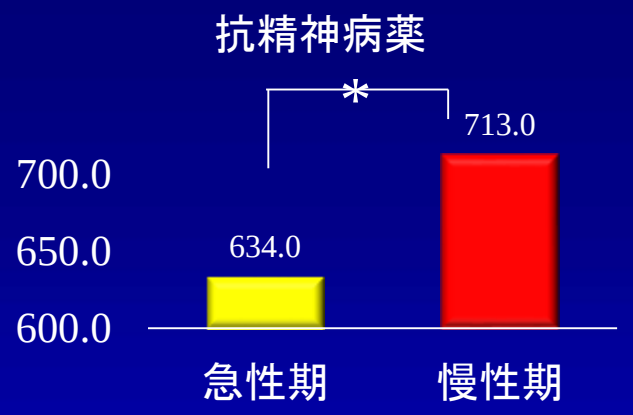
急性期と慢性期の比較

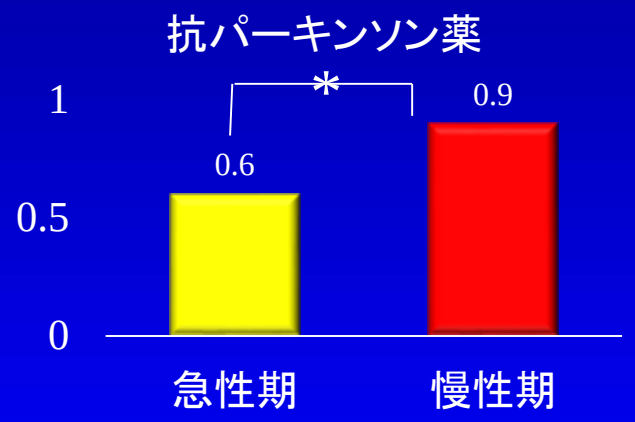
	急性期	慢性期
病床種別	救急･急性期	精神一般･療養
患者数 （男/女）	1424 （671/753）	7787 （3874/3913）
平均年齢 （min-max）	50.0 （13-95）	60.2 （14-101）
服薬指導 実施率	23.0%	24.7%

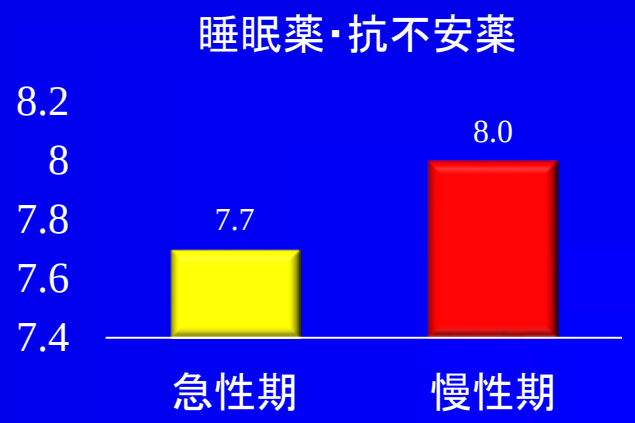
急性期V.S慢性期

投与量







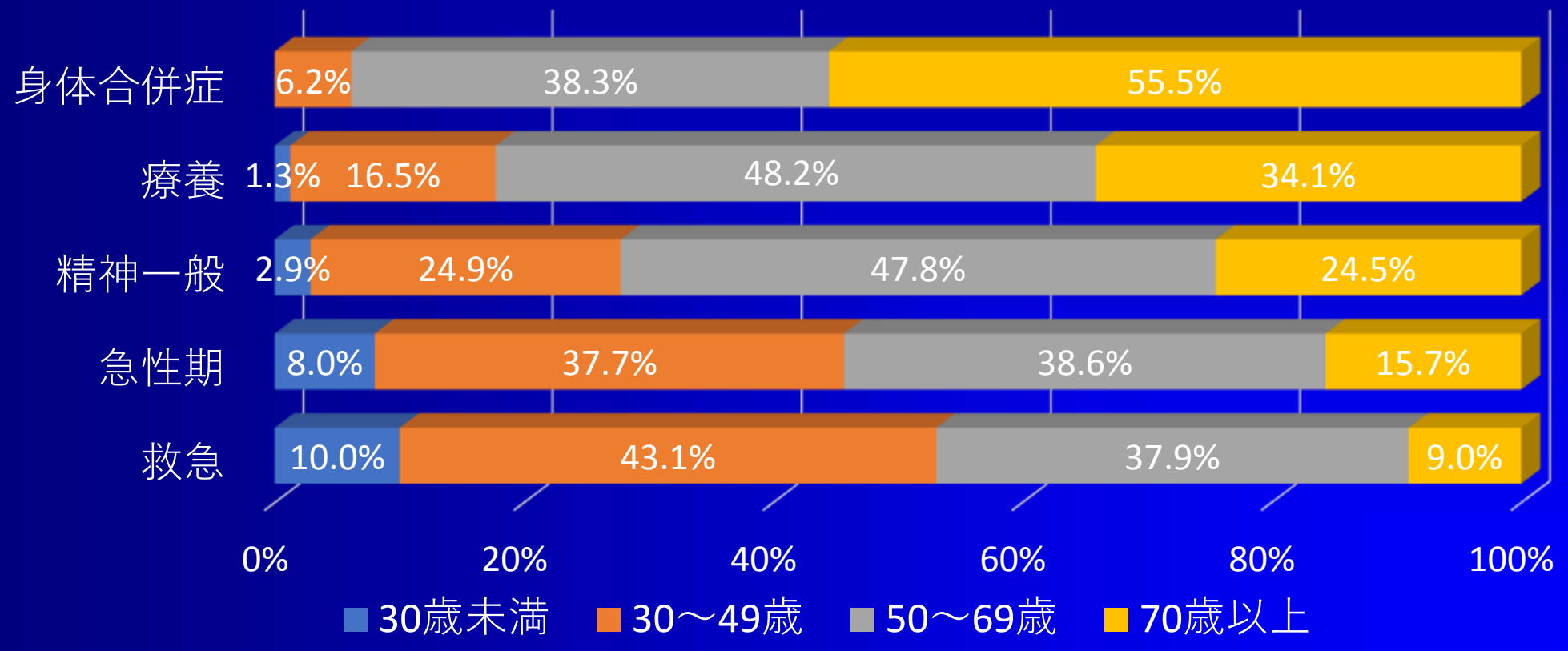


Student-t検定P＜0.05＊

病棟機能別　調査対象の内訳

	救急	急性期	一般	療養	合併症
患者数 (男/女)	887 (414/ 473)	536 (256/ 280)	4362 (2233/ 2129)	3425 (1641/ 1784)	227 (96/ 131)
平均年齢 (min-max)	48.5 (13-85)	52.5 (16-95)	58.2 (14-97)	62.8 (20-101)	69.4 (35-91)
平均 服用回数 (min-max)	2.84 (0-7)	3.18 (0-10)	3.33 (0-10)	3.40 (0-8)	3.24 (0-7)
服薬指導 実施率	21.7%	25.0%	37.4%	8.6%	4.0%

病棟機能別　年齢構成


身体合併症
6.2%
38.3%
55.5%
療養
1.3%
16.5%
48.2%
34.1%
精神一般
2.9%
24.9%
47.8%
24.5%
急性期
8.0%
37.7%
38.6%
15.7%
救急
10.0%
43.1%
37.9%
9.0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
30歳未満
30～49歳
50～69歳
70歳以上

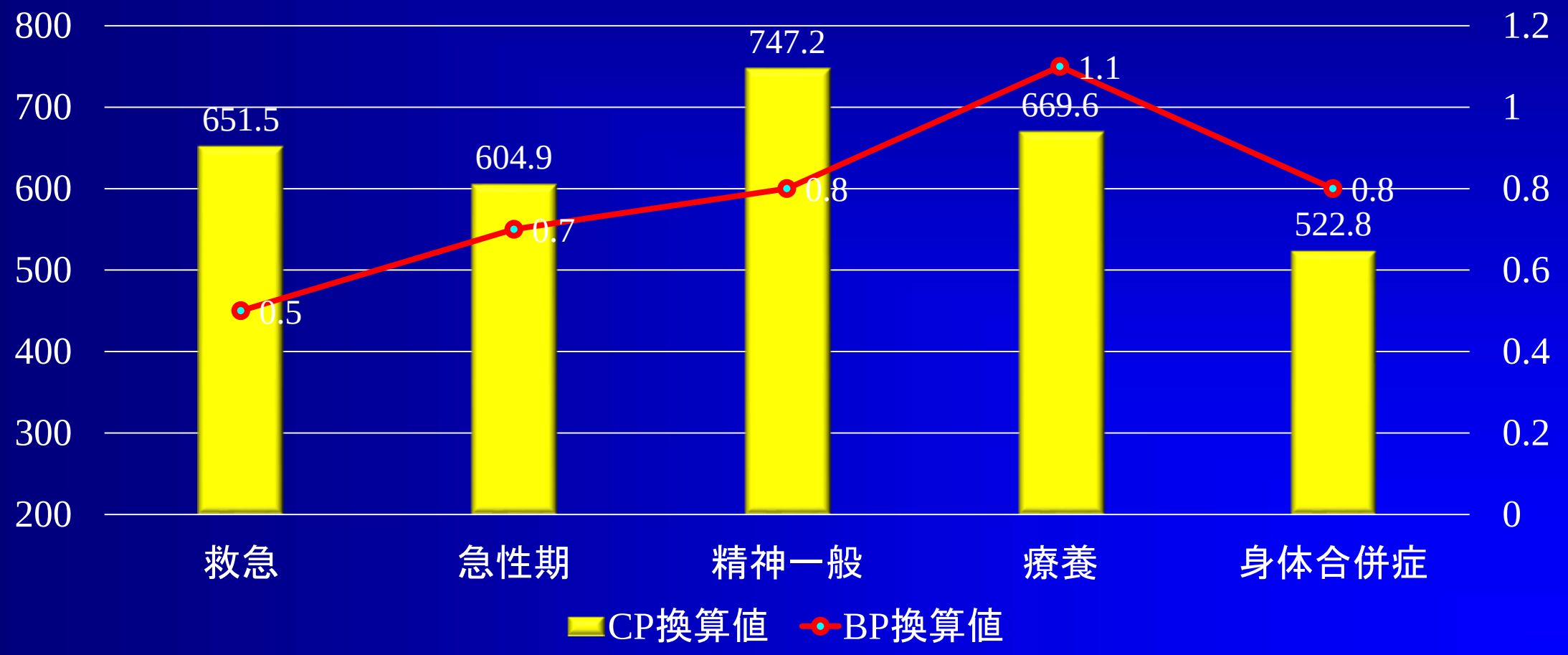
病棟機能別　使用薬剤順位

	救急	急性期	精神一般	療養	身体合併
1位	オランザピン	リスペリドン	オランザピン	リスペリドン	リスペリドン
2位	リスペリドン	オランザピン	リスペリドン	オランザピン	オランザピン
3位	アリピプラゾール	レボメプロマジン	クエチアピン	レボメプロマジン	レボメプロマジン
4位	クエチアピン	クエチアピン	レボメプロマジン	クエチアピン	クエチアピン
5位	ブレクスピプラゾール	ブレクスピプラゾール	ハロペリドール	ハロペリドール	クロルプロマジン

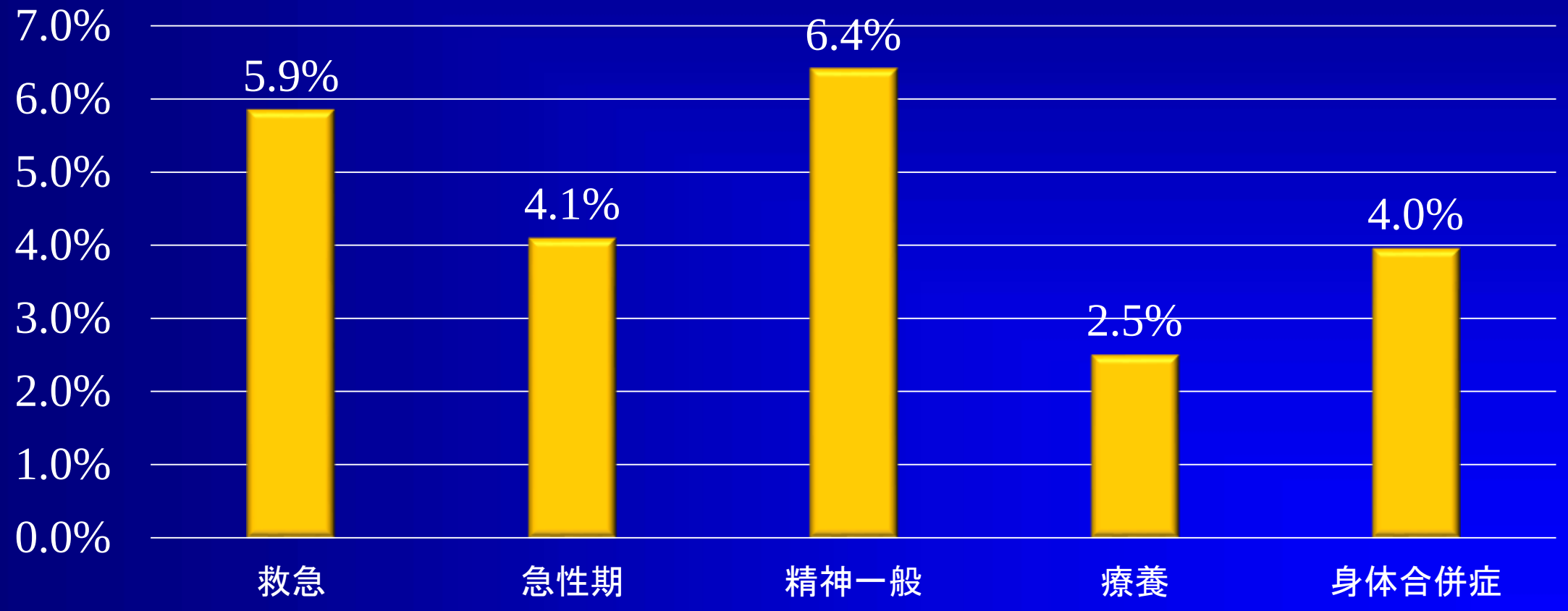
病棟機能別　投与量・投与剤数

	救急	急性期	一般	療養	合併症
抗精神病薬投与量	651.5	604.9	747.2	669.6	522.8
抗精神病薬剤数	1.4	1.5	1.6	1.6	1.4
単剤化率（%）	49.1	47.4	42.3	42.9	43.6
投与無比率（%）	9.0	7.6	6.5	5.5	14.5
抗パ剤投与量	0.5	0.7	0.8	1.1	0.8
抗パ剤投与剤数	0.2	0.3	0.3	0.4	0.3
睡眠薬・抗不安薬投与量	6.5	9.5	7.3	8.8	6.6
睡眠薬・抗不安薬投与剤数	0.9	1.2	1.0	1.1	0.8

抗精神病薬と抗パーキンソン薬の投与量



病棟機能別クロザピン投与率



結　果

- 急性期病棟と慢性期病棟において抗精神病薬、抗パーキンソン薬、睡眠薬・抗不安薬の投与量、投与剤数を比較した結果、抗精神病薬、抗パーキンソン薬においては投与量、投与剤数とも慢性期病棟のほうが優位に多かった。しかし、睡眠薬・抗不安薬については差は認められなかった。
- 抗精神病薬の使用数については、病棟機能関係なくリスペリドン、オランザピンは上位2位を占めた。3位以下については病棟機能毎に特徴がみられた。
- 病棟機能別の抗精神病薬の投与量については、精神一般病棟がCP換算で747.2mgと最も高かったが、抗パーキンソン薬の投与量はBP換算で1.1mgで療養病棟が最も高かった。
- クロザピンについては、全ての病棟においてまだ低い投与率であるが、中でも療養病棟では2.5%と最も低くかった。
- すべての病棟で抗精神病薬が処方されていない患者が一定数いることがわかった。

考　察

- 抗精神病薬の投与量の比較から、慢性期病棟には疾患の長期化に伴い、より多くの投与量が必要な患者が入院していることが示唆された。
- 一般的に抗精神病薬と抗パーキンソン薬の投与量の間には相関関係があるといわれているが、病棟機能別の投与量からは、相関関係が認められず、特に療養病棟における抗パーキンソン薬の投与が抗精神病薬の投与量に比べ多いことが分かった。その背景には抗パーキンソン薬の併用が少ないとされているクロザピンの投与比率の低さ、また、服薬指導実施率の低さから薬剤師の関わり少ないことが影響しているのではないかと考えられる。
- 一定数いる抗精神病薬を投与されていない患者に対して、どのような治療が行われているのか、今後の調査で解明していく必要があると考える。